

1. C@RNA Connectを用いた 放射線検査業務・画像診断連携

中山 善晴 (株) ワイズ・リーディング / 熊本機能病院地域医療連携画像診断センター

近年の医療現場では、医局体制の崩壊が地域医療にも大きな試練を与えており、深刻な医師不足や医師の地域偏在に拍車をかけている。

筆者自身も、これまで放射線科医として熊本県を中心いくつかの医療機関への勤務を経験し、地域によって画像診断の質に差があることを強く感じていた。熊本都市圏以外では、常勤の放射線科医がいない施設も多く、画像診断の質が十分に担保できている状況とは言えない。そのような中で、熊本大学医学部放射線医学教室から、限られた人的資源を有効に活用する遠隔画像診断事業を設立する話をいただき、産学連携事業として、熊本遠隔画像診断センターを2008年に設立する運びとなった。遠隔読影システムは、富士フイルム社に開発をお願いし、遠隔読影の事業運営については(株)ワイズ・リーディングが行っている。

遠隔画像診断の現況

熊本遠隔画像診断センターは現在、依頼施設が26施設、月間の読影依頼数が2500件を超えており、それらの読影を約20名の放射線科専門医で行っている。依頼施設は、診療所から地域中核病院までさまざまであり、各施設から依頼される検査数や検査の難易度も多種多様である。

熊本遠隔画像診断センターでは、“読影医が実施する依頼の振り分け業務”と“一次と二次読影による運用”を採用し(図1)、読影レポートの質担保と効率的な運用を実現している。

読影医が実施する依頼の振り分け業務とは、当社の専属医師による画像振り分け業務である。熊本大学医学部放射線医学教室に所属する放射線科専門医に読影をしていただくのだが、その読影医に対して依頼する症例を選択する。当社の専属医師が依頼内容を確認し、連携している医師の専門分野やスキルを重視して読影を依頼するので、読影時間の効率化が期待できる。

また、一次読影と二次読影による運用も行っている。一次読影医の読影レポートを再度確認する、つまり、二次読影を実施する医師を置くことで、見落としや誤診がないかの確認だけでなく、文体の統一、誤字脱字の修正などを行い、依頼施設側にもわかりやすいレポートを提出することができる。

ほかにも、依頼側と読影側間でのコミュニケーションにも力を入れている。依頼

側からは、患者状態を補足する診療放射線技師のコメント、術後の病理診断結果の報告など、一方、読影側からは、撮影条件、次の検査法、フォロー時期のアドバイスなどを互いに通知できる仕組みも導入し、積極的に活用している。

熊本機能病院地域医療 連携画像診断センターの 地域医療連携

筆者は、ワイズ・リーディングの運営を行う一方で、熊本市北部地域にある地域中核病院(医療法人社団 寿量会熊本機能病院)の地域医療連携画像診断センター長として勤務している。熊本市北部診療圏には、約22万人が生活している。圏内に、医療機関は約180か所あるが、放射線科医が常勤する医療機関は1か所しかなく、画像診断の空白地帯となっている。2008年、地域における画像診断の拠点をづくり、地域の医療連携を推進することを目的として、熊本機能病院地域医療連携画像診断センターが開設された。その設立にあたり、筆者がお手伝いをさせていただいた。

当センターの設立以前は、近隣の医療機関からのCT、MRIなどの検査は電話やFAX等で受付業務を行っていたため、業務を中断して電話受付をする必要があり、非効率な部分があった。また、スタッフの勤務時間以外、検査予約を受けられないため、近隣の医療機関への検査日時確定が遅延することもしばしばであった。

そこで、当センターの設立を機に、こ